

特別企画 講演

現実の社会的構成と言語

—第二言語教育（学）者のための社会学的教養—

講師：西口光一さん

大阪大学国際教育交流センター／大学院言語文化研究科

■ 日時 ■

2018年6月29日（金）18：00～20：00

■ 会場 ■

早稲田大学早稲田キャンパス22号館502号室

定員：30名（事前申し込み制、定員になり次第申し込み締め切り）

参加費：会員無料、非会員2,000円

参加申し込み・お問い合わせ

project@alce.jp（言語文化教育研究学会 企画委員会）

お申し込み、入金方法等、詳細は
<http://alce.jp/monthly/>



【講演 要旨】

言語を物象化してその構造や要素を教えるという発想から離脱して、根本の人間的な生（生きること）を見つめながら、第二言語教育を考え、企画し実践しようとする第二言語教育（学）者は、そもそも人間とは何か、社会とは何か、文化とは何か、そしてそうした事象の中で言語はどのような位置を占め、人と人とのコミュニケーション（接触・交わり）はいかに可能なのか、などの問いに直面せざるを得ない。そのような問いを探究するのに、大きく心理学、社会学、言語（哲）学という3つのアプローチが考えられる。

本講演では社会学からのアプローチとして Berger and Luckmann の知識社会学（Berger and Luckmann, 1966/2003、Berger, 1967/1997、後ろは邦訳の出版年）を中心に論じる。「社会は人間の所産である」、「社会は客観的現実である」、「人間は社会の産物である」という3つのテーゼ（人間学的必然性）を柱とする知識社会学は、上記のような問いを考究するための重要な眺望を提供してくれるだけでなく、社会文化史や発達心理学にも接続しうる観点を与えてくれる。本講演では、はじめに社会学理論の中での知識社会学の位置を明らかにした上で、まずは、人間学的必然性のメカニズムとなる社会の弁証法について論じる。次に、知識社会学における人間観と言語観を概観する。言語観の概観においては、ノモス（意味秩序）と言説の関係についても論じる。さらに、社会の構成や自己の構成などにおける言語の働きについて検討し、言語におけるノエシス-ノエマ構造を確認する。こうした考察を通して、わたしたちが生きることににおける言語の位置を明らかにするとともに、第二言語の習得と習得支援の関心から見た場合の言語の多面性を明るみにする。

本講演は論考「人間学とことば学として知識社会学を読み解く—第二言語教育学のためのことば学の基礎として—」（西口, 2018 <http://hdl.handle.net/11094/67901>）を基としているので、参加予定の方はあらかじめ同論考を読んだうえで、ご持参されることをおすすめします。

【西口光一 プロフィール】

大阪大学国際教育交流センター／大学院言語文化研究科教授。主な著書に『第二言語教育におけるバフチンの視点—第二言語教育学の基盤として—』（2013, くろしお出版）、『対話原理と第二言語の習得と教育—第二言語教育におけるバフチンのアプローチ—』（2016, くろしお出版）がある。

